

「第9回全国高校生英語ディベート大会in静岡」開催

38都道府県64校が出場！

高校生が英語力、論理力を競う全国大会

2014年12月、静岡県浜松市で、「第9回全国高校生英語ディベート大会in静岡」が開かれた。

第1回大会では17都道府県からの参加だったが、ディベートの輪は全国に広がっていき、本大会では38都道府県で予選会が行われた。「日本政府は、原子力発電所を廃止すべきである。是か、非か。」を論題に、参加64校が2日間にわたって熱い論戦を繰り広げた。

世界大会への出場を目指して
4人が力を合わせて戦う

「全国高校生英語ディベート大会」は、全国高校英語ディベート連盟（H E N D A）主催、文部科学省後援、G T E C for S T U D E N T S（株式会社ベネッセコーポレーション）特別協賛によって毎年開かれていく、高校生対象の全国的な英語ディベート大会だ（*1）。

本大会は、W S D C (World Schools Debating Championships) の日本代表選考会を兼ねており、第1回大会から優勝校が出場してきた。現在

は参加校の中から優れた高校生を選抜したチームで出場している。また、第5回大会からは、I D E A (The International Debate Education Association) Youth Forum の出場権が優勝チームに与えられている。まさに、英語ディベートの高校生日本一を決める大会となっており、これまで静岡県・私立加藤学園暁秀高校、埼玉県立春日部女子高校、長野県伊那北高校、さいたま市立浦和高校などが世界大会に出場を果たしてきた。

本大会で採用されているディベートの形式は、議論の仕方を学び、相手の主張を正しく理解することを目的とした「アカデミックディベート」。

1試合に掛かる時間は約1時間。2チームが肯定 (Affirmative Side) と否定 (Negative Side) に分かれて対戦する (写真1)。肯定側が肯定の根拠を述べた後 (4分)、否定側からの質疑応答 (2分) ↓ 否定側の立論 (4分) ↓ 肯定側からの質疑応答 (2分) というように、規定の持ち時間、順番に沿って議論を進めていく。「立論」「アタック」「ディフェンス」「総括」と各論を展開し、ジャッジがどちらのチームがより論理的で説得力が高いかを判定して勝敗を決める。

試合に出場できるのは1チーム4人で、4つのスピーチの役割をあらかじめ決めておく。選手登録は6人

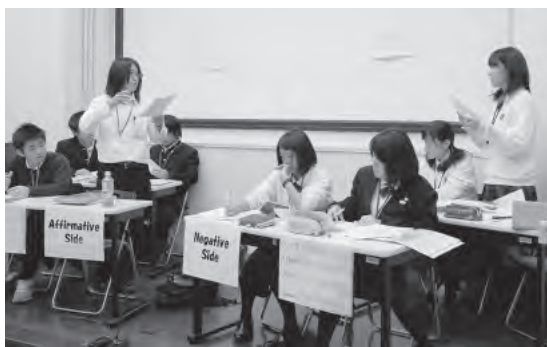


写真1 肯定側 (Affirmative Side) と否定側 (Negative Side) に分かれ、「立論」「アタック」「ディフェンス」「総括」とそれぞれスピーチを行い、「立論」「アタック」では質疑応答も行う。

まで出来るので、試合によって出場選手の入れ替えが可能だ。帰国子女や留学経験者の登録制限があり、ほ

*1 詳しくは全国高校英語ディベート連盟のウェブサイトをご覧ください。
<http://www.henda.jp/>

● **論題** 日本政府は、原子力発電所を廃止すべきである。是か、非か。

The Japanese government should abolish nuclear power plants.

● **地区予選参加校数** 38 都道府県 282 校、443 チーム

(2010年 26 都道府県、2011年 27 都道府県、2012年 32 都道府県、2013年 37 都道府県)

● **本選出場校** 38 都道府県 64 校 ★は決勝トーナメント出場校

- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|-------------|
| ・北海道札幌国際情報高校 | ・千葉県立成田国際高校 | ・岐阜県立益田清風高校 | ・広島市立舟入高校 |
| ・札幌聖心女子学院高校 | ・千葉国際高校★ | ・聖マリア女学院高校 | ・山口県立宇部高校 |
| ・北嶺高校★ | ・創価高校 | ・静岡県立浜松北高校 | ・愛媛県立松山南高校 |
| ・岩手県立一関第一高校 | ・渋谷教育学園渋谷高校 | ・加藤学園暁秀高校 | ・土佐高校 |
| ・山形県立山形西高校 | ・栄光学園高校★ | ・愛知県立千種高校 | ・福岡県立修猷館高校 |
| ・茨城県立竹園高校 | ・洗足学園中学校 | ・暁高校 (6年制) | ・福岡県立東筑高校 |
| ・茨城県立水戸第一高校 | ・新潟県立国際情報高校 | ・近江兄弟社高校 | ・佐賀県立唐津東高校 |
| ・茨城県立並木中等教育学校★ | ・富山国際大学付属高校 | ・滋賀県立米原高校 | ・佐賀県立佐賀西高校 |
| ・栃木県立宇都宮高校★ | ・石川県立金沢泉丘高校 | ・京都府立洛北高校 | ・熊本県立熊本高校 |
| ・栃木県立宇都宮女子高校★ | ・石川県立金沢二水高校 | ・関西創価高校★ | ・熊本県立済々黌高校 |
| ・栃木県立宇都宮東高校★ | ・福井県立武生東高校 | ・灘高校 | ・岩田高校 |
| ・群馬県立中央中等教育学校 | ・山梨県立谷村工業高校 | ・和歌山県立向陽高校 | ・宮崎県立宮崎西高校 |
| ・群馬県立前橋高校 | ・長野県松本県ヶ丘高校 | ・和歌山県立桐蔭高校 | ・ラ・サール高校 |
| ・さいたま市立浦和高校 | ・長野県上田高校 | ・島根県立出雲高校 | ・鹿児島県立大島高校 |
| ・埼玉県立浦和高校 | ・長野県伊那北高校 | ・岡山県立岡山城東高校 | ・鹿児島県立甲南高校 |
| ・埼玉県立大宮高校 | ・高山西高校 | ・岡山県立岡山朝日高校 | ・沖縄県立那覇国際高校 |

● **入賞 優勝** 神奈川県・私立栄光学園高校

準優勝 栃木県立宇都宮高校 **3位** 北海道・私立北嶺高校、茨城県立並木中等教育学校

5位 栃木県立宇都宮東高校、栃木県立宇都宮女子高校、千葉県・私立千葉国際高校、大阪府・私立関西創価高校

駿河国賞 長野県松本県ヶ丘高校 **飛騨賞** 新潟県立国際情報高校 **メイクフレンズ賞** 兵庫県・私立灘高校

ベストサポーター賞 (大会運営を支援してくれた高校)

静岡県立浜松北高校、静岡県立浜松西高校、静岡県立掛川東高校、京都府立嵯峨野高校、岐阜県・私立岐阜聖徳学園高校

とんどの選手が日本ですと英語を学んできた高校生だ。限られた時間の中で、相手の主張に耳を傾け、明確な根拠を示し、いかに自説を論理的に構築できるかが勝敗の鍵を握る。つまり、英語が堪能なチームが必ずしも勝つとは限らない。

**入念な準備をして議論を展開
聴衆も熱心にメモを取る**

今回のテーマは「日本政府は、原子力発電所を廃止すべきである。是か、非か。」(The Japanese government should abolish nuclear power plants)。地区予選を勝ち抜いてきた出場校は、北海道から沖縄まで38都道府県64校(図)。第1回から連続出場している高校もあれば、初出場の高校もあり、ディベートの経験や英語レベルは様々だ。

試合は2日間にわたり、1日目は予選4試合、2日目は予選1試合と決勝トーナメントが行われた。

予選はどのチームも5試合を戦う。最初の2試合はくじで対戦相手を決め、3試合目以降はパワー・ペアリング方式(*2)で組み合わせ

を決める。肯定側と否定側をそれぞれ2試合以上行うように配慮されている。予選での得点が上位8チームに入れば、決勝トーナメントに進める。

テーマは大会開催の5か月前に発表される。どのチームも、テーマについて入念に調査し、様々な角度から考えて肯定・否定それぞれの論を立てる。更に、対戦相手からのようなアタックが来るのかを想定し、それへの対応策も何十通り、何百通りと考えておく。試合中は、相手の立論をメモし、準備しておいた分厚い資料も見ながら、何を質問するのか、どうディフェンスをするのか作戦を練る(写真2)。



写真2 スピーチとスピーチの間には、1~2分間の準備時間が設けられている。相手のスピーチを聞き、どのような質問をするか作戦を練る。

*2 出来るだけ勝数が同じチーム同士が対戦し、当たりの善しあしの影響を減らす対戦方式。



写真3 熱気にあふれる決勝戦の会場。1階席・2階席共に満席だ。司会進行は全て英語で行われ、開会式・閉会式での来賓のスピーチも英語で行われた。

「立論」では用意してきた原稿を読み上げる場面もあったが、質疑応答はもちろん「アタック」や「ディフェンス」では、マイクを握りしめて、何も見ずに自分たちの考えを熱く語る生徒たちの姿が見られた。

聴衆も熱い。特に、2日目の決勝トーナメントでは、どの会場も超満員（写真3）。通路にも人があふれていた。予選で敗退したチームも、すぐに帰ってしまうわけではない。「どんな立論を仕掛けてくるのだろうか」「あの人の英語力が気になる」と、お

目当てのチームや選手を見に来る生徒たち。スピーチ中は自分が出場していなくても熱心にメモを取り、スピーチが終わると、チームメイトとその内容に対して自分たちならどう攻めていくかを話し合っていた。

決勝戦の組み合わせは、肯定側は神奈川県・私立栄光学園高校、否定側は栃木県立宇都宮高校。予選終了段階では、宇都宮高校はあらゆる論に対して準備が出来ており、的確なアタックをしてくると、各校からの評判が高かった。一方、栄光学園高校は、大会直前に新しい論が浮かび、大会前日に他校があまり準備をしていないと思われる内容に仕上げた。両校共に流暢な英語でスピーチを行い、相手に鋭い質問を投げ掛けるという、スリリングな論戦が展開された結果、栄光学園高校が優勝を飾った。

矢野善郎大会審判長が、「英語力、論理力共に甲乙付けがたかったが、栄光学園高校が肯定側ディフェンスで『リスクは小さいというが、それほど死と隣り合わせの職業は他にありませんか』と述べたのが決め手となりました」と講評し、熱戦の幕が

閉じた。

論戦したからこそ生まれる 他校生との友情

本大会は、2005年、生徒が授業で学んだ英語を使う機会をもっと設けようという趣旨で、11都県26校が参加してプレ大会を実施したのが始まりだ。その後、第1回大会は17都府県38校、第2回大会は22都府県50校と、会を重ねるごとに参加校は増えていき、第4回大会からは出



写真4 試合が終われば、みんな友達。健闘をたたえ合い、どのような気持ちで試合を進めていたのかを伝え合っていた。

場校数を64校に固定した。予選を開催する都道府県も年々増えている。今回の地区予選は、38都道府県で実施され、282校が出場。1校で複数チーム出場できる地区予選では、延べ443チームが本大会への切符を競った。このように、英語ディベートの裾野は広がりつつある。

英語ディベートの意義は、英語を手段として使うことで、英語によるコミュニケーション能力が格段に上がると見込める点にある。自分たちが組み立てた論理を伝えたい、相手の意見を理解したいといった気持ちがあるからだ。ただ、大会の意義はそれだけではない。大会のコンセプトは、「Make friends」。ディベートを通じて全国に友達の輪を広げることも狙いの1つだ（写真4）。大会1日目の最後には、出場者の交流会が開かれ、それまで互いに知らなかった生徒同士が談笑したり、連絡先を交換し合ったりしていた。閉会式後も、会場の各所で記念撮影をしたり、健闘をたたえ合ったりする光景が続いた。

第10回大会は、15年12月に岐阜で開催される予定だ。

普段の部活動で培ってきた力を出し切れた！

私たちは英語部のメンバーです。部活動では、その場で論題が与えられ、準備は10～20分程度と即興で行うパラメンタリーディベートを行っています。入念な準備が必要なこの大会の形式には戸惑いもありましたが、部員一丸となって準備を進めてきました。学校の決まりで、部活動は週2回、約3時間です。テーマが発表されてからは、各自が家で調べてきたことを持ち寄り、どのような論を立てるか、アタックにどう対抗していくかを練っていきました。苦しかったのは、欲しいエビデンス（論拠）が見付からなかった時です。論調の弱いところをあぶり出し、補強をしていくのですが、求めているデータが見付からなければ、論を再考しなければなりません。そうやって何度も主張を練り直しました。

実は、決勝トーナメントで展開した主張は、大会直前に考え付き、すぐにエビデンスを探し、前日に書き上げたものです。更に、1日目の反省を踏まえ、夜に書き直しました。大会審判長が講評された「勝

敗の決め手となった論」は、相手の主張を聞いていて、その場で考え付いた主張です。部活動でパラメンタリーディベートを行っていたからこそ、あの場で最適な主張が思い付いたのだと思います。最後まで諦めずに粘って本当に良かったです。

将来の夢は、医者や研究者など、メンバーそれぞれですが、今学んでいる英語も使いつつ、社会の役に立つような人になりたいと思います。



英語部員全員で喜びを分かち合う。

大会運営委員インタビュー

英語ディベートのすそ野を更に広げ、生徒が英語を使う機会をもっと増やしたい

本大会は第9回を迎え、全国各地の様々な高校が出場しています。英語ディベートの教育効果に着目し、本大会を新任教員研修の場として教員を派遣されている自治体もあると聞いています。準備の進め方や立論の方法などは、各校に蓄積されつつあり、先輩から後輩へと受け継がれているようです。

本大会がこのように発展しているのも、英語教育の重要性がますます認識され、生徒が英語を学ぶ環境を整えようという意識が浸透しているからでしょう。英語ディベートの大きな特徴は、一方的に自分の意見を主張するのではなく、相手の意見もしっかり聞き、それを理解した上で、自分の意見を主張する場であるということです。それが出来る力は、今、日本社会で育成が求められているグローバル人材に必要な力でもあります。一方的に主張するだけでは、交渉は成立しません。“Good Speaker”であると共に、“Good Listener”であることが、コミュニケーションではとても大切なのです。

これまで、日本は国内だけで生活が完結していました。ところが、今や海外赴任をしている30代、40代は大勢いますし、海外からも多くの人々が来て、日本で働いています。今の高校生が大人になる頃には、更にグローバル化が進んでいることでしょう。そうした時代の動きを積極的につかみ、指導に反映させていくことこそが、今、学校教育に求められているのではないのでしょうか。

2014年度には、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業が始まりました。今後、英語ディベートを更に広げていくためにも、ディベート講習会だけでなく、ジャッジを育成するセミナーなども開いていければと思います。



全国高校英語ディベート連盟理事長
岐阜聖徳学園大教育学部教授

加納幹雄

かのう・みきお